

シンポジウム「口承文芸の未来」で問われたことを考える

川田順造

「口承文芸の未来——どのように継承されるべきか——」と題し

たこのシンポジウムは、学会の第三八回研究例会として、一九九九年一〇月一六日（土）午後、東京の國學院大學で、三時間余りをかけて行われた。この研究例会には、学会の長老、中堅、若手、各層の会員約六〇名が参加し、熱のこもった討論が閉会時間になつても尽きず、この問題が私たち口承文芸研究者の現在にとつてもつ意味の重さを、改めて考えさせられた。前年度の研究例会のことであるにもかかわらず、問題提起者五人の方々に改めて筆をとつていただき、その論点を誌上に再現するのも、今後に残された課題の大きさのためである。このシンポジウムの企画と当日の司会を受けもつた者として、前口上の役を務めるが、一年前の議論を単に再現したり、五人の方々の意見を要約するのは無駄があるので、シンポジウムを振り返って、現時点での私見を手短かに述べる。

「口承」文芸が、生きた口伝その繼承のうちに、独自の生命をもつていることはいうまでもない。そしてこれまで生きた繼承を支えてきた生活条件が、いま大きく変化していることも、私たちは自覚している。その変化を口承文芸の危機と捉えるか、過去にも絶えずあつたはずの変化の継続と見るかは、問題にする領域によつても、視点によつても、一様ではないだろう。だが、それなら何が、何故、一様でないのかを、異なる領域や視点を提示しあい、対置することで共通の課題として考える道をつくるべきだというのが、このシン

ポジウムを企画した始点での意図だった。

このようないま仕事をしておられる五人の方に、問題提起をお願いした。

(一) 伝統的な語り（一）、花部英雄氏、(二) 伝統的な語り（II）、川森博司氏、(三) 現代の民話、米屋陽一氏、(四) ストーリーテリング、藤野時代氏、(五) 作業歌、岩井正浩氏。「伝統的な」語りをめぐる問題提起を二つに分けたのは、地方ごとに語り伝えられた昔話の優れた伝承者、つまりその地方の「伝統的な」語り方で、「伝統的な」昔話を数多く伝承している人を訪ねて、できるだけ多くの語りを忠実に記録するという、「伝統的な」昔話の採録が直面する問題と、「伝統的な」昔話の「伝統的な」語りを、意図的に地方文化振興の事業として保存実施している、遠野をはじめとする地方の活動が含む問題とを、別に立てて交差させながら議論することが有効だと考えたからである。他の三つの領域を取り上げたことについては、説明を要しないであろう。

どの領域の問題提起者にも共通する基本認識は、伝承を支えてきた状況が大きく変化しているということである。だがこの点は、(二)(三)(四)のように、現代の変化そのものの認識が、活動の出发点ないし原動力になつてゐる領域と、(一)や(五)とでは、変化ということの受け止め方が当然ながら異なつてゐる。現代の社会的状況の変化が、最も直接にしかも決定的に作用しているのは、

(五) の作業歌の領域であろう。ここでは、とくに一九六〇年代に始まるいわゆる高度成長に伴う生活文化全般の大変化によって、歌を支えていた作業そのものだけでなく、その作業についての実感の記憶さえ失われつつあるからであり、同時にマスメディアや観光の発達普及によって、歌の演奏と享受のあり方も、かつてとは全く様相を変えたからである。いうまでもなく、作業歌には、山から伐りだした木を運び出す作業の歌から、鳶の地形の作業歌、祭礼での鳳輦の先導といった儀礼歌、祝い事の祝儀歌、お座敷歌にもなった木遣り音頭に一例を見るように「伝統的」にも、作業から離れて芸能化したもののは多い。歌の場合は、その性質上とくに芸能化しやすいといえるが、歌も含めた口承文芸全体が、広い意味で「芸」の領域に属する人間の活動であり、実用、実効を第一の目的とするものでないことを認識する必要がある。だからこそ逆に、生活文化全体の変化が起つても、形や位置を変えて伝承されるともいえるのである。

同時に、口承文芸の継承にとつて、これまで私たち研究者が十分に注意してこなかつたと思われる点に、語り歌う、歎び楽しみの側面がある。アフリカの電灯のない曠野の村で、月明かり、星明かりの下で夜更けまでつづく、生きた昔話や謎などの言葉遊びの団居で感銘を受けたのは、聞く楽しみにも増して、語る歎びの強いことだつた。これはかつて孫たちにせがまれて炉端で「むかし」を語つてきかせた日本の山里の嫗にも、一夜の宿を借りた家の娘たちを興がらせた六部や薬売りにも、現代の学校の怪談を語つて級友を怖がらせる少年にも、ストーリーテリングの会で、稽古を重ねた昔話を語りで、集まつた人たちを感動させたときの現代の語り部にも、重

要なものとしてあるに違いない。この「語る歎び」「歌う歎び」に注目することは、生きた伝承のあり方を考える上で、軽視してはならない点であると思つ。

これと関連して、これから特に考えられなければならないのは、口承文芸におけるプロとアマの問題であろう。話芸も歌も、研究者はしばしばそれが專業のプロの仕事でない場で、口承文芸の社会的意味をからませながら、問題にしてきた。だがストーリーテリングでも、地方文化振興事業としての昔語りでも、マスメディアにのる歌でも、ボランティアであり、素人であることを、私たちは前提にする必要がある一方で、伝統的にも、瞽女、万歳、琵琶法師、説教師など、プロの芸と伝承も重要な役割を果たしてきた。口承文芸のパフォーマンスにおけるプロとアマの異同がどこにあるか、それは今後の口承文芸の継承のされ方、とくに、活力のある継承に不可欠のインセンティブ、つまり誘因、動機づけにとってどのような意味をもつのかに注目することは、伝承の現在と未来を問う上で一つの要になるのではないだろうか。

こうした点を含めて、現代に起こりつつの変化がどれほど大きなものであろうと、人間があり、口承文芸がある限り、語りや歌の「場」も、その「場」でのパフォーマンスも、語り手や歌い手と聞き手の関係もあり、それが生きたものである限り、継承もあるに違いない。もし消滅したものがあるとすれば、それは研究者が「伝統的」求めていたものが、消滅したとみるべきなのであろう。

一年前の熱気に満ちた三時間の議論を振り返って、ささやかな私見を述べ、改めて学会員諸氏の批判と検討に供したい。